

第2章 宇陀市の維持・向上 すべき歴史的風致

歴史まちづくり法において「歴史的風致」とは、「地域における固有の伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史的価値の高い建造物及びその周辺の市街地とが一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。

当市は、古代から中央政権と深い関わりを持ち、京・大阪や紀州方面と伊勢方面を結ぶ交通の要衝地であった。支配者層から庶民に至るまで、聖地巡礼や参勤交代等、様々な目的を背景に人・物・情報が往来して発展を遂げる一方で、地域では農業のほか葛の生産や薬草の栽培等、環境に応じた産業が根付き、人々の暮らしを支えてきた。古代・中近世・近代と、各時代の特色が重層的に残る豊かな環境のなかで、昔ながらの暮らしの作法や伝統行事が今も息づいており、当市の歴史的風致を形成している。

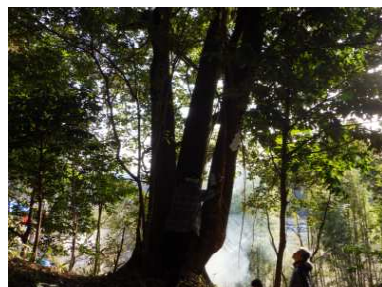
当市におけるこれらの維持・向上すべき歴史的風致は、記紀・万葉の名跡や伊勢街道沿いの旧集落に残る「巡礼にまつわる歴史的風致」、おもに寺院や神社等で展開される「信仰にまつわる歴史的風致」、当市の自然環境に応じて展開されている「生業にまつわる歴史的風致」と、近世より宇陀郡の中心地として栄えた町場にまつわる「宇陀松山の水路と商いゆかりの行事にみる歴史的風致」と、以下の通り大きく4つに分類された8つの歴史的風致を設定した。



巡礼にまつわる歴史的風致
(榛原山辺三 赤人会式)



信仰にまつわる歴史的風致
(菟田野古市場 太鼓台巡行)



生業にまつわる歴史的風致
(室生小原 山の神)



町場にまつわる歴史的風致
(大宇陀万六 寒施行)

1. 記紀・万葉ゆかりの地の営みにみる歴史的風致

コラム1
壁画「阿騎野の朝」

2. 伊勢街道の旧宿場町の営みにみる歴史的風致

2-1 伊勢街道の分岐点、萩原の年中行事にまつわる歴史的風致

2-2 本街道沿いの集落の営みにみる歴史的風致

2-3 あお越え道沿いの集落の営みにみる歴史的風致

3. 宇太水分神社の祭礼行事にみる歴史的風致

コラム 2
伊勢湾台風からの
復興

4. 室生寺周辺の行事にみる歴史的風致

コラム 3
宇陀市内の地藏盆

5. 宇陀市の民俗芸能にみる歴史的風致

5-1 大野のいさめ踊りにまつわる歴史的風致

5-2 宇陀市の盆踊りにまつわる歴史的風致

5-3 宇陀市の獅子舞にまつわる歴史的風致

コラム 4
阿紀神社の神事能

6. 宇陀の田畑と山林にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-1 宇陀の稲作にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-2 黒大豆の生産にまつわる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

6-3 宇陀の山の営みにみる祭礼行事ゆかりの歴史的風致

コラム 5
フクマルと、とんど(どんと)

コラム 6
庚申さん

コラム 7
ダリアの生産

7. 薬草の生産と活用まつわる歴史的風致

7-1 薬草を活かした暮らしにまつわる歴史的風致

7-2 本葛の製造販売にまつわる歴史的風致

7-3 大和茶の生産にまつわる歴史的風致

コラム 8
大和当帰の栽培

コラム 9
森野旧薬園

8. 宇陀松山の水路と商いゆかりの行事にみる歴史的風致

8-1 各大字の参会にまつわる歴史的風致

8-2 前川とその周辺に残る水路にまつわる歴史的風致

8-3 施行にまつわる歴史的風致

8-4 宇陀の初市にまつわる歴史的風致

コラム 10
水のわかれと氏子域

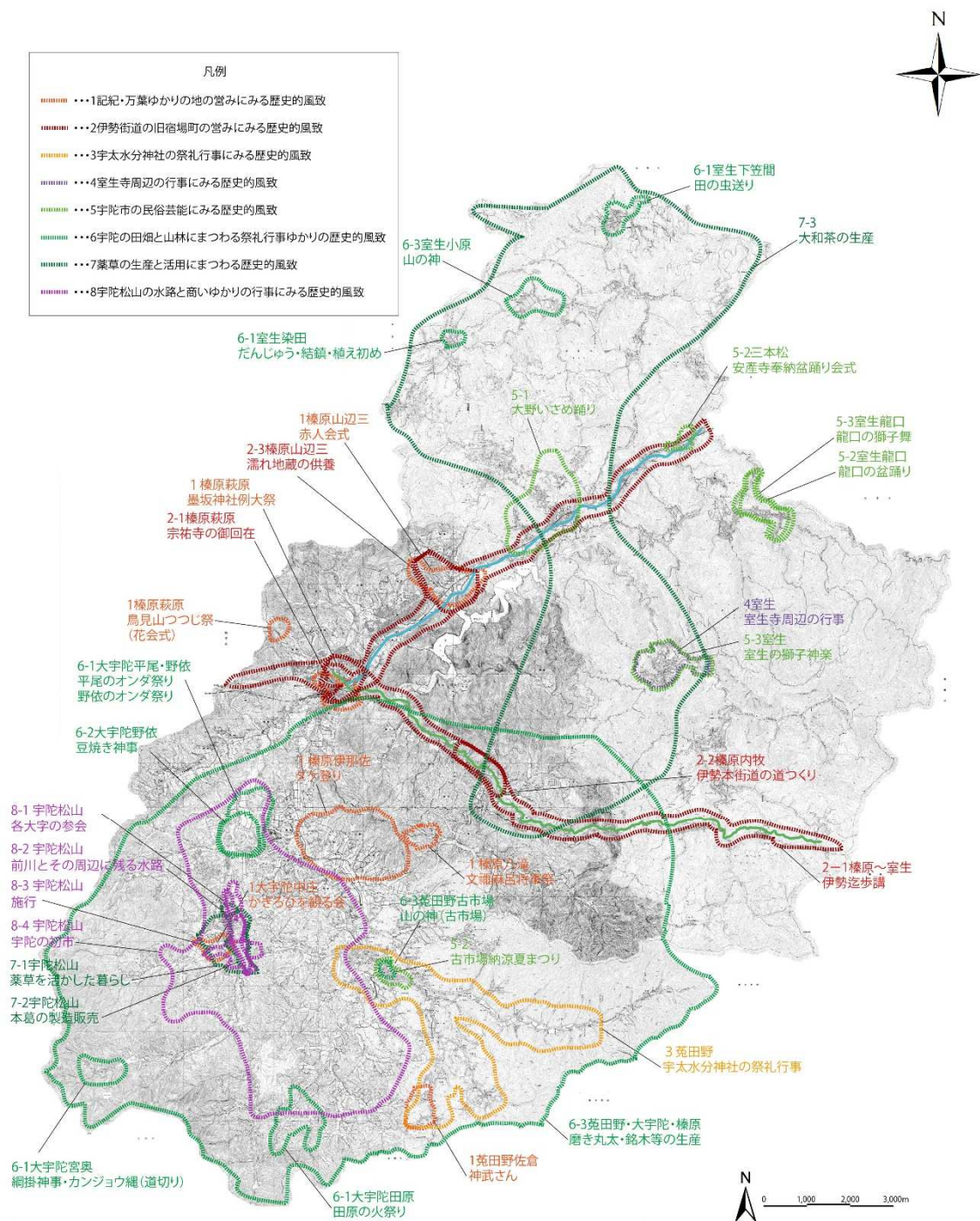


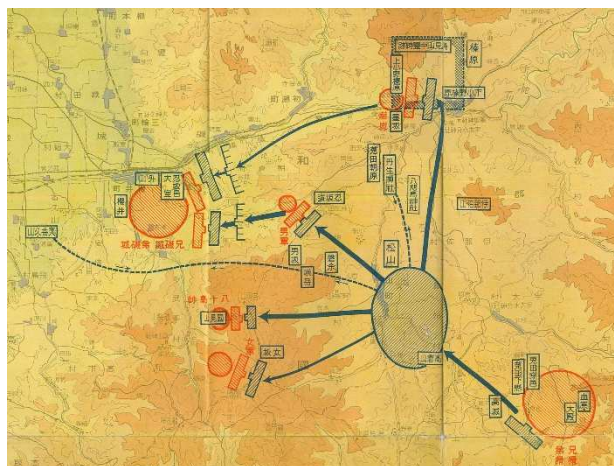
図 2-1 宇陀市内の歴史的風致 分布図

1. 記紀・万葉ゆかりの地の営みにみる歴史的風致

(1) はじめに

日本最古の書物『古事記』¹⁴や、最初に作られた勅撰^{ちよくせん}（天皇の命令により編纂された）の歴史書『日本書紀』¹⁵、これらをまとめて「記紀」と呼ぶ。「記紀」には「宇陀血原」「宇陀墨坂」など、宇陀の地が数多く登場する。同様に、現存する日本最古の歌集『万葉集』でも、宇陀の地名が歌われているものや、宇陀の地で歌われたとされるものがある。その代表的な歌が柿本人麻呂の「東の野にかぎろひの立つ見へて返り見すれば月傾きぬ」である。「記紀」『万葉集』に関連する顕彰碑・歌碑などの分布は次頁の通りである。また、関連する地名をまとめると63頁の表のとおりとなる。

宇陀市内には、記紀・万葉ゆかりの地の顕彰活動が盛んにおこなわれた昭和15年（1940）前後に建てられた数々の石碑や、万葉歌碑、記紀・万葉に登場した地や人物にちなんだ活動が今も残っている。これにまつわる建造物と活動について紹介する。

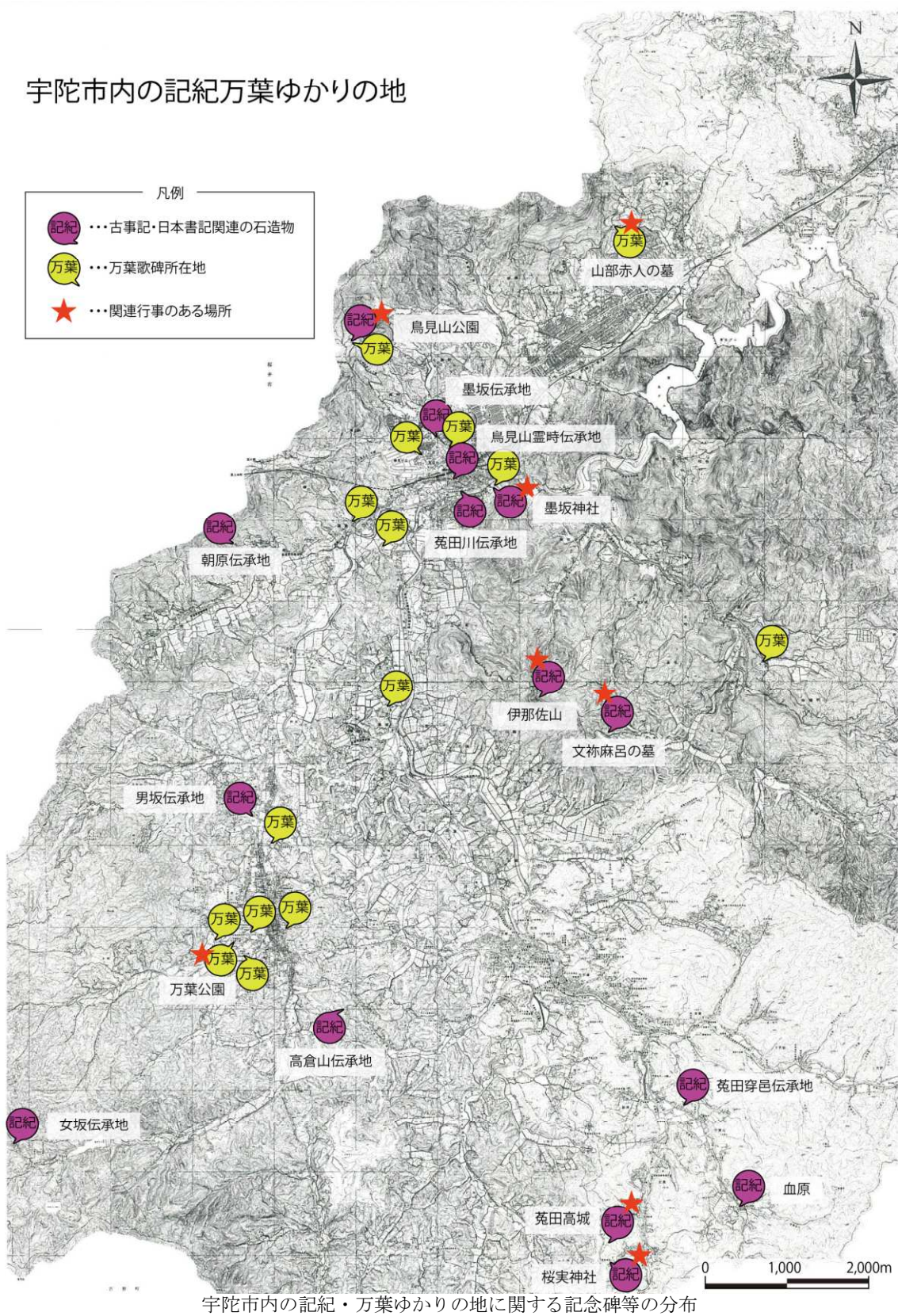


地図付きガイドブック『大和宇陀神武天皇御聖蹟』(昭和11年(1936)金沢藤七 著)(個人蔵)
表紙(左)と地図抜粋(右)

¹⁴ 『古事記』は現存する最古の書物である。天武天皇が「帝紀（皇室の記録）」と「旧辞（神話・伝承・歌謡）」を研究して、正しいことを後世に伝えるよう命じ、編さん事業が始まったと『古事記』に記されている。稗田阿礼が語り伝えたものを太安万侶がまとめ、和銅5年（712）に完成した。3巻構成で、上巻は天地のはじめから天孫降臨前後の神々の物語、中巻は神武天皇から応神天皇までの英雄伝説、下巻は仁徳天皇から推古天皇までの物語である。

¹⁵ 『日本書紀』は最初の勅撰の歴史書である。養老4年（720）に完成した。天武天皇が、「帝紀」と「上古諸事」の史実を確定して記録するよう命じた事に始まる。

宇陀市内の記紀万葉ゆかりの地



宇陀市における記紀・万葉ゆかりの地（『大和古代地名辞典』（1998年1月/日本地名学研究所編）より）

番号	地名等	記載	推定される所在地	備考
1	うだのちほら 宇陀血原	古事記 神武天皇記	宇陀市菟田野宇賀志	兄宇迦斯の遺体から流れた血で赤く染まった場所にちなんで血原と呼んだ
2	うだのたかき 宇陀能高城	古事記 神武天皇記	宇陀市菟田野佐倉	神武天皇が弟宇迦斯が献した宴で披露した歌の歌詞に登場する。
3	いなきのやま 伊那佐山	古事記 神武天皇記	宇陀市榛原山路	兄師木、弟師木を撃ち、疲れた軍を慰めるため詠った歌詞に登場
4	うだのすみさか 宇陀墨坂	古事記 崇神天皇記	宇陀市榛原萩原	宇陀の墨坂神に赤色の楯矛を祭り、大阪神に墨色の楯矛を祭り、疫病退散の祈願をした
5	うだのしもむり 菟田下泉	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市菟田野宇賀志	菟田穿邑をさす、とある。
6	うだのちほら 菟田血原	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市菟田野宇賀志	兄狛の遺体から流れた血で赤く染まった場所にちなんで血原と呼んだ
7	うだのうむめ 宇陀穿邑	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市菟田野宇賀志	吉野から菟田穿邑へ至った
8	うだたかくやま 菟田高倉山	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市大宇陀大東	八十梟師との闘いにおいて高倉山の頂から全体を見渡し差配した
9	墨坂	日本書紀 神武天皇即位前紀	宇陀市榛原榛原	兄磯城等との闘いにおいて、女軍を墨坂に配し迎え撃った
10	とみのやま 鳥見山	日本書紀 神武天皇紀	宇陀市榛原萩原	神武天皇4年2月23日に皇祖天神を鳥見山の霊時に祭った
11	すみさか 墨坂神	日本書紀 崇神天皇紀	宇陀市榛原萩原	崇神天皇9年3月15日に赤盾8枚・赤鉾8竿をもって墨坂神を、黒盾8枚・黒鉾8竿をもって大坂神を祀れと神託を受け、病氣平癒を祈願した
12	うだ 菟田	日本書紀 雄略天皇紀		冬十月に鳥官の禽、菟田の人の狗に噛まれて死ぬ。天皇嘆る。
13	うだのこほり 菟田郡	日本書紀 皇極天皇紀		菟田郡の菟田山にて見つけた芝草（しそう）という紫の菌（たけ）を食した人が健康長寿を得たという噂話を聞いた
14	おほの 大野	日本書紀 天武天皇紀上	宇陀市室生大野	天武天皇元年6月24日、東国へ行く途中に經由する。
15	うだのあき 菟田吾城	日本書紀 天武天皇紀下	宇陀市大宇陀迫間	天武天皇9年3月23日に行幸
16	やたがらすのしろ 八咫鳥社	続日本書紀 文武天皇	宇陀市榛原高塚	文武天皇慶雲2年9月、八咫鳥社を大倭国宇太郡に置き祭る
17	なむさかごう 波坂郷	元明天皇	宇陀市榛原八滝・内牧か	和銅6年7月宇太郡波坂郷の人、銅鐸を長岡野の地に得て献る。
18	すみさか 墨坂	万葉集	宇陀市榛原萩原	君が家に 我が住坂の 家道をも 我は忘れじ 命しなずは
19	やそくまきか 八十隅坂	万葉集	宇陀市榛原萩原か？ （墨坂？）	百足らず 八十隅坂に 手向けせば 過ぎにし人に けだし逢はむかも
20	うだのの 宇陀乃野	万葉集		宇陀乃野の 秋萩しのぎ 鳴く鹿も 妻に恋ふらく 我にはまさじ
21	おほの 宇陀乃大野	万葉集	宇陀市室生大野	けころもを 時かたまけて 出でましし 宇陀乃大野は 思ほえむかも
22	まほに 宇陀乃真赤土	万葉集		山跡の 宇陀乃真赤土の さ丹つかば そこもか人の 我を言なさむ
23	あきの 安騎野	万葉集	宇陀市大宇陀迫間	輕皇子、安騎野に宿る時に 柿本朝臣人麻呂の作る歌
24	むらふ 室原	万葉集	宇陀市室生	日本の 室原の毛桃 本繁く 言ひてしものを 成らずば止まじ

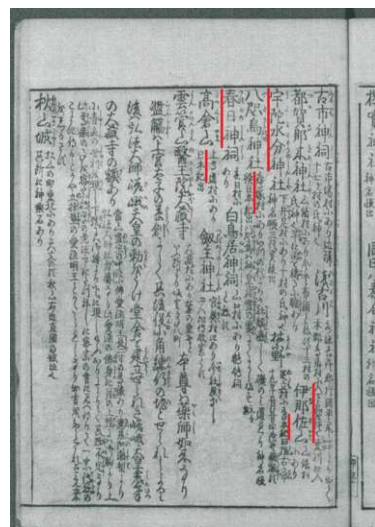
『古事記』『日本書紀』が編纂された目的は、『^{てい}帝^き紀』(天皇や皇室の系譜をまとめたもの)と『^{きゅう}旧^じ辞』

(「記紀」以前に存在したとされる日本の歴史書のひとつ)の伝承であった。「記紀」の完成から約千年後には、旅行先のひとつとして、これらの歴史に縁のある土地を訪ね歩いていたようだ。『^{やまとめいしよ}大和名所図会^え』

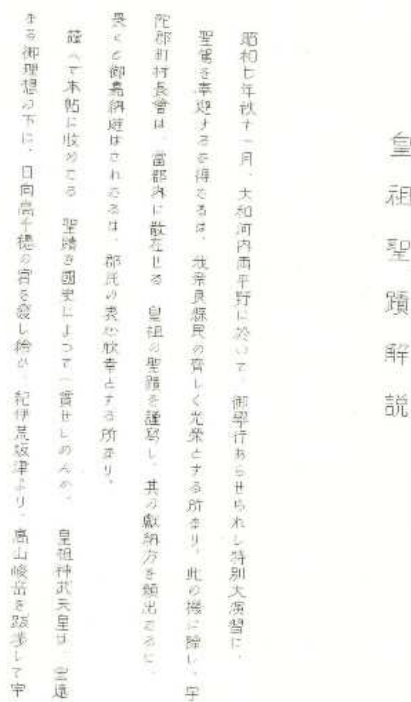
(秋里舜福 著/竹原信繁 画/寛政3年(1791))、4巻に宇陀の見どころが盛り込まれている。主に『^{えんぎ}延喜式神名帳^{しきじんみょうちょう}』(延長5年(927))に記載のある神社や室生寺などの名刹とともに、血原、高倉山など「記紀」にある地名がいくつも登場する。

物見遊山の行先として捉えられていた記紀ゆかりの地も、昭和3年(1928)の金融恐慌と翌年の大恐慌の時期に社会運動が激化し、国体の擁護が叫ばれるようになると、「神武陵のある建国の聖地」大和が強調される動きから『古事記』『日本書紀』の神話が重要視されるようになり、神話に登場する地名はどこかと探索する動きが大きくなった。いわゆる「^{せいせきけん}聖蹟頭^{しょううんどう}彰運動」である。

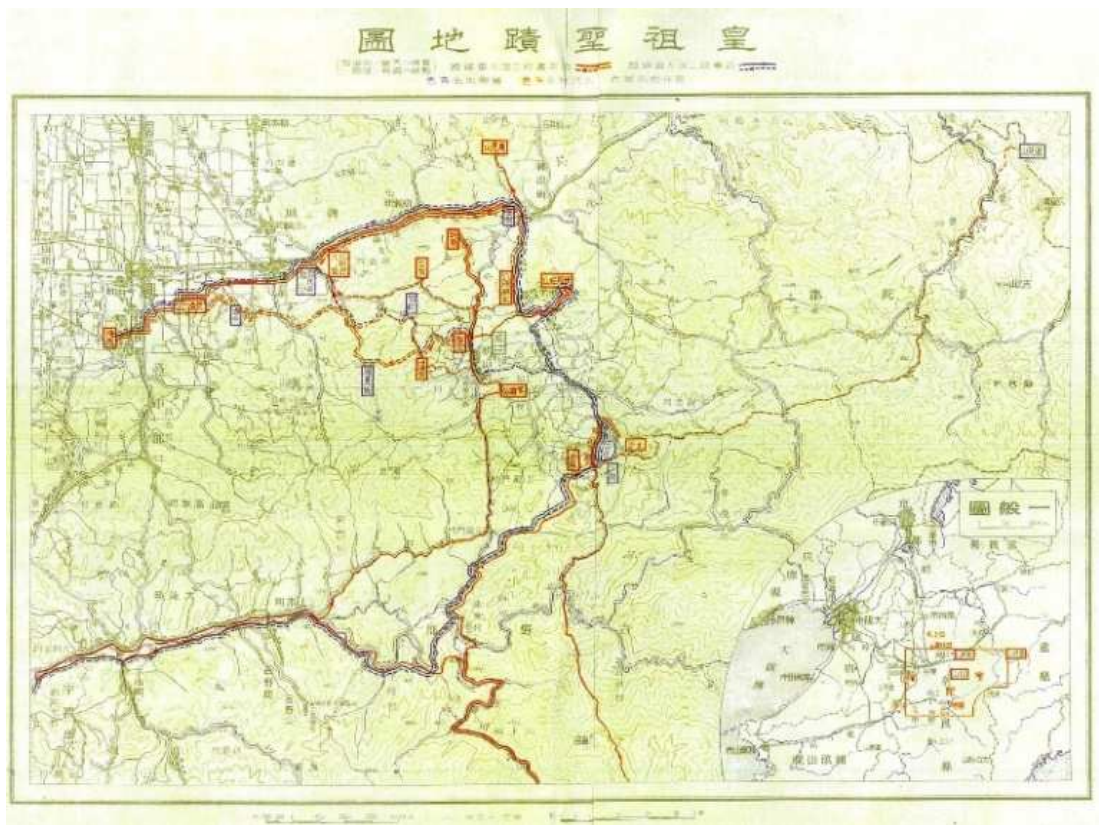
この運動は、代議士や首長等、地域の有力者が中心となり行われた。皇祖聖蹟地図は、昭和7年(1932)11月に天皇陛下御臨席のもと軍事演習が奈良県・大阪府にて行われた際に献納するために、宇陀郡町村会で制作されたものである(右写真の解説より)。次頁の地図に描かれた青線が『古事記』による進路、赤線が『日本書紀』による進路を示し、神武天皇ゆかりの地名が赤文字、敵軍(兄^{えうかし}猾、八十梟帥、兄磯城^{えしき})ゆかりの地名が青文字で記入されている。なお、これらの場所は、いずれも当時の宇陀郡が皇祖聖蹟の所在地であると主張していた場所である。



大和名所図会
(奈良県図書情報館蔵)



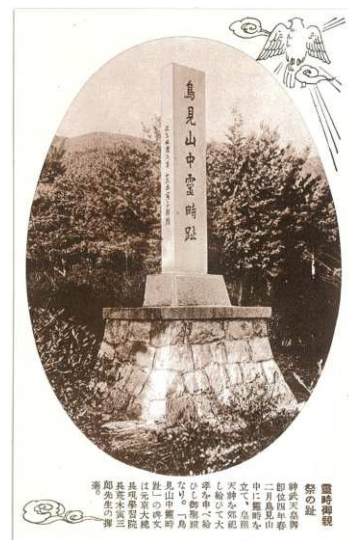
皇祖聖蹟解説(昭和7年(1932)奈良県宇陀郡町村会 制作)



皇祖聖蹟地図（昭和 7 年（1932）奈良県宇陀郡町村会 制作）

この運動が活発化した結果、「記紀」に登場する地名をどこにするかで争いが起こるようになり、鳥見山^{れいじ}霊時¹⁶は桜井と榛原で本家争いが繰り広げられたほか、生駒郡富雄村、南生駒村小平尾、丹波市町滝本、新沢村一なども名乗りを上げた。

そこで県社寺課は神武聖蹟調査を行い、伝説地は洩れなく取入れて 55 箇所を挙げたが、これにより各地の聖蹟争いが激化した。次に昭和 13 年（1938）12 月、文部省により神武天皇聖蹟調査委員会が組織され、政府の手により「聖蹟」が決定された。その結果が次頁の表で、全国で 19 箇所（うち奈良県は 7 箇所）が「神武天皇聖蹟」に選定され、記念碑が建てられた。また、県や町村でも縁^{ゆかり}の地に石碑など



鳥見山霊時趾を PR するための絵葉書（昭和初期）（墨坂神社蔵）

16 『日本書紀』神武天皇 4 年条に「乃ち^{すなわ} 霊^{まつり} 時を鳥見山の中に立てて、其地を号けて、上小野、下小野の榛原と曰ふ。用て皇祖天神を祭りたまふ」とある。神武天皇が即位後に鳥見山で祭祀を行ったとの記述で、権威ある学識者の揮毫をしたための石碑の建設や聖蹟地図の出版をしたほか、国会議員や首長までが乗り出して議場で論戦を交わすなど、熾烈な争いが繰り広げられた末、桜井市が伝承地に選定された。

を建て皇紀 2600 年事業を盛り上げた。

宇陀市内では、国に選定された聖蹟として「菟田^{うだ}穿^{のうがちむら}邑（菟田野宇賀志）」「菟田高倉山伝説地（大宇陀守道）」の 2 箇所に顕彰碑があるほか、奈良県の事業として建てた石碑「男坂^{おさか}伝承地」「女坂^{めさか}伝承地」「墨坂伝承地」「菟田川^{うだのあさはら}伝承地」「菟田朝原伝承地」が残っている。町村の事業でも、伝承地へ向かう道の途中に石の道標を建てている。また、選定されなかったが、地元有志による聖蹟顕彰運動の中で建てられた石碑もある。（鳥見山公園、榛原駅前等）

決定された「神武天皇聖蹟」奈良県分一覧

決定された「神武天皇聖蹟」

「聖蹟」名	決定された地域・地点	否定または根拠なしとされた地域・地点
1 丹生川上	吉野郡小川村	吉野郡川上村道・丹生村長谷など 4 ヵ所
2 菟田高倉山	宇陀郡政始村・神戸村（高倉山山頂）	宇陀郡榛原町・内牧村、吉野郡高見村・竜門村
3 榎原宮	高市郡畝傍町	なし
4 鵜色	おおよそ生駒郡北原村・富雄村にわたる地方	磯城郡城島村外山
5 鳥見山中霊時	磯城郡城島村・桜井町	宇陀郡榛原町萩原・南生駒村小平尾など 9 ヵ所
6 菟田穿邑	宇陀郡宇賀志村宇賀志	なし
7 磐余邑	磯城郡桜井町・安倍村・香久山村	宇陀郡神戸村
8 狭井河之上	磯城郡三輪町・磯田村	なし
9 国見丘	決定なしがたきものとされる	宇陀郡神戸村本郷など 5 ヵ所
10 阪上 藤間丘	〃	南葛城郡阪上村本馬山など 2 ヵ所
11 忍坂 大室	〃	
12 吉野	〃	

『紀元二千六百年祝典記録』第 8 冊による。県内の分のみ、神武天皇聖蹟調査委員会による決定。

※赤線から下は決定されなかった地域

万葉集は、奈良時代末期に成立したとみられる日本に現存する中では最古の和歌集である。全 20 巻 4,500 首以上の和歌が収められており、天皇・貴族から下級官人・防人・大道芸人・農民など様々な身分の人々が詠んだ歌が選ばれている。7 世紀前半から 759 年までの約 130 年間の歌が収録されており、和歌の原点ともいわれている。日本の元号「令和」は、この万葉集の「巻五梅花の歌三十二首并せて序」の一節を典拠としている。

近世に入り、学芸文化の興隆から万葉研究を行う国学者が現れる。万葉集研究者として名を馳せた下河辺^{しもこうべ}長流^{ちやうりゅう}¹⁷と契沖^{けいちゅう}¹⁸により著された『万葉集』の注釈・研究書『万葉代匠^{まんようだいしょう}記』（貞享 4 年（1687）初稿本）以降、田安宗武^{たやす たけ}、本居宣長^{もとりのりなが}などにより万葉研究が進められ、近代には国語や国文学の観点から齋藤茂吉^{さいとう もきち}、折口信夫^{のぶお}、佐佐木信綱^{ささきのぶつな}らにより万葉研究が続けられた。

そして昭和 15 年（1940）に照準をあわせた皇紀二千六百年祭の開催に伴い、

1940 年に選定された「神武天皇聖蹟」一覧

番号	聖蹟（文部省『神武天皇聖蹟調査報告書』1942 年より）	現 地 点
1	花狭（うさ）推考地	大分県宇佐市南宇佐
2	関水門（おかのみなと）	福岡県遠賀郡戸屋町正門町
3	埃宮・多都理宮（えのみや・たけりのみや）伝説地	広島県安芸郡府中町宮の町
4	高嶋宮（たかしまのみや）伝説地	岡山県岡山市高島
5	難波之崎（なにわのみさき）	大阪府大阪市北区天満橋 2 丁目
6	唐津（たてつ）推考地	大阪府東大阪市日下町 6 丁目
7	孔倉衛坂（くさのえさか）伝説地	大阪府東大阪市香櫓寺町 1 丁目
8	1. 雄水門（おのみなと）伝説地 2. 男水門（おのみなと）伝説地	1. 大阪府泉南市男里 2. 和歌山県和歌山市湊本町 2 丁目
9	名草邑（なぐさのみら）推考地	和歌山県和歌山市広原
10	狭野（さの）	和歌山県新宮市佐野 3 丁目
11	熊野神邑（くまのかみのむら）	和歌山県新宮市阿須賀 2 丁目
12	菟田穿邑（うだのうがちむら）	奈良県宇陀市菟田野宇賀志
13	菟田高倉山（うだのたかくらやま）伝説地	奈良県宇陀市大宇陀大東
14	丹生川上（にうのかわかみ）	奈良県吉野郡東吉野村小
15	磐余邑（いわれのむら）推考地	奈良県桜井市吉備
16	鵜色（ういのみら）	奈良県生駒市上町
17	狭井河之上（さいがわのほとり）推考地	奈良県桜井市茅原
18	鳥見山霊時（とみのやまのなかのまつりのにわ）伝説地	奈良県桜井市河西

17 元和 9 年（1623）宇陀松山生まれ、国学者。若くして京大阪に遊学し、漢学の傍ら国学を修めた。仕官の道を断念し、大阪で読書三昧のちに古学を研究、和歌をよくした。晩年、水戸藩の依頼で万葉集の注釈書の執筆を請けたが完成を見ないまま貞享 3 年（1686）病没。

18 寛永 17 年（1640）尼崎生まれ、真言宗の僧であり国学者。11 歳で出家し修行のため畿内を転々とする。病を得た下河辺長流のあとを引き継ぎ、『万葉代匠記』を完成させる。

「記紀」のみならず『万葉集』やこれらのゆかりの地も注目されることとなる。

「記紀」・『万葉集』は、文学、歴史学、考古学をはじめ学術分野の重要な研究対象となっており、その解釈をめぐる様々な議論が今もある。先述のように皇国史観¹⁹による国威発揚に用いられた経緯もあり、第二次大戦後は広く一般の人々に親しまれるものであったとは言えない時期もあった。

そんな中で平成 23 年度（2011）より、奈良県では「本物の古代と出会い、本物を楽しめる奈良」の確立を目的として「記紀・万葉プロジェクト」を立ち上げ、『古事記』完成から 1300 年を迎える平成 24 年（2012 年）から、『日本書紀』完成から 1300 年を迎える令和 2 年（2020）にかけて、伝承関連地のデータベースづくりやイベントの開催等を展開してきた。

また、各市町村においても記紀・万葉プロジェクト会議を立ち上げ、記紀・万葉ウォーク等、現状から古代の面影を辿る取り組みを重ねている。これら一連の活動により、改めて「記紀」『万葉集』ゆかりの地に関心に向け、地域の誇り醸成へ寄与することを目指して取り組んでいる。

¹⁹ 日本の歴史が万世一系の天皇を中心として展開されてきたと考える歴史観。日中戦争から太平洋戦争期に、国民統合と戦争動員に大きな役割を果たしたが、敗戦により退潮した。

(2) 建造物

【神武天皇聖蹟顕彰碑】

石造。文部省の調査を経て選定された神武天皇聖蹟を顕彰するために建てられた記念碑。記念碑側面に「昭和十五年十一月 紀元二千六百年奉祝会」と刻まれており、昭和15年（1940）に建立された。宇陀市内にはこの記念碑が2箇所あり、菟田野宇賀志に「神武天皇菟田穿邑顕彰碑」、大宇陀守道に「神武天皇聖蹟菟田高倉山顕彰碑」が今も残る。

神武天皇聖蹟顕彰碑は、建築家大江宏（1913～1989）が文部省技手時代に設計を担当した物件のひとつで²⁰、基壇の上に字を刻んだ切石を積んでいる。

いずれの顕彰碑も、掃除と手入れが行き届いており、地元の住民が大切に守っている。神武天皇の命日にあたる4月3日には祭典を行っている。

【神武聖跡関連の石造物】

石造。紀元二千六百年祭のために、国がゆかりの地を選定して石碑を建てたように、県や町村も同様に伝承地への道標や記念碑を建てた。

県の事業としては、男坂伝承地（大宇陀半坂）・女坂伝承地（大宇陀宮奥）・墨坂伝承地（榛原萩原）・菟田川伝承地（榛原萩原）・菟田朝原伝承地（榛原雨師）の石碑を建立している。いずれの石碑にも、側面に「紀元二千六百年奈良縣奉祝會建立」「昭和十五年十一月」と刻まれている。

伝承地とされる場所の石碑は大きく、伝承地へ向かう途中の道に建てられた道標は分岐点の手前に置かれ、矢印ではなく指で進む方向を標記しており手間をかけて作ったものであることが推察できる。



菟田穿邑顕彰碑



菟田高倉山顕彰碑
（国設置の石碑）



菟田朝原伝承地石碑
（県設置の石碑）



男坂



女坂

（県設置の道標）

²⁰大江宏は日本万国博覧会日本館の設計などで知られる建築家である。「大江宏設計 神武天皇聖蹟顕彰碑の設計過程～文部省技手時代の大江宏の設計活動に関する研究その1」（『日本建築学会計画系論文集 第83巻 第747号』/石井翔大/2018年5月/日本建築学会）によると、大江建築アトリエ（旧大江宏建築事務所）には、大江が文部省技手時代に作成したスケッチや図面、書類などの一次資料が複数保存されており、現地踏査の復命や顕彰碑の設計プロセスがわかるスケッチが現存する。

【都賀那岐神社本殿】

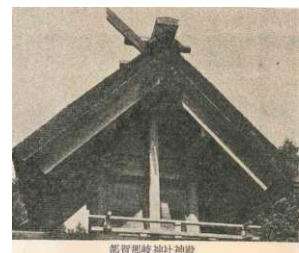
伊那佐山の頂上に鎮座する神社。一間社神明造、銅板葺。『榛原町史』(榛原町史編集委員会/昭和34年(1959))の写真と現状を比較すると、茅葺から銅板葺に屋根の仕様が変わったが、躯体は現状の建物と同規模で材が相応に古いことから、昭和34年(1959)以前からこの場所にあったことがわかる。



都賀那岐神社本殿



都賀那岐神社側面



『榛原町史』より

4月最終日曜日に、氏子が揃って本殿に参拝して、神社前の広場にて直会をする「ダケ登り」と言われる行事が続いている。かつては早魃時に祈雨のため松明を持って「雨タンブリタモレ」と掛け声をかけながら参拝したと伝わる。祭神は高たか竈おかみのかみ神、頬つらな那ぎのかみ芸神で、いずれも水を司る神である。

【都賀那岐神社 丁石】

伊那佐山の麓から頂上までの間、1丁ごとに丁石が設置されている。12cm角、長さはまちまちだが、60cm前後のことが多い。

麓の十八丁の丁石のみ大きく、昭和7年(1932)建造と側面に刻まれている。ダケ登りのときなど、伊那佐山へ登る際の目安として役立っている。

丁石にはそれぞれ、寄進者の名が刻まれており、三丁・九丁・十二丁・十三丁・十五丁・十六丁の寄進者の生没年を調べたところ、いずれも昭和7年(1932)当時は30代後半～60代後半と存命中で、丁石の質感がよく似ていることから、十八丁目の丁石と同時期に一丁間隔で建立したと推察する。丁石は現在、一丁、四丁、六丁、十一丁、十四丁が欠けている。



十八丁



十七丁



十六丁



十五丁



十三丁



十二丁



十丁



九丁



八丁



七丁



五丁



三丁



二丁

都賀那岐神社 丁石 昭和7年(1932)設置、石造

【^{ふみのね まろのはか}文 祢麻呂墓】（国の史跡）

文祢麻呂は、壬申の乱で武功を立てた武将である。天保2年（1831）八滝村の常七が畑の中から銅箱・金銅壺等を発見、奉行所へ届け出たあと、出土品は地元の^{りゅうせんじ}龍泉寺に保管されることになった。

出土品の中には墓誌があり、被葬者が慶雲4年（707）に亡くなった文祢麻呂であることが判明する。出土品は明治11年（1878）に帝室博物館（現在の東京国立博物館）に収蔵され、昭和27年（1952）に国宝に指定された。

銅箱等が出土した場所は、昭和57年（1982）に発掘調査が実施され、代表的な奈良時代の墳墓で、古代の上級役人の埋葬方法がわかった数少ない事例として重要な遺跡であることから昭和59年（1984）国の史跡に指定され、整備が行われた。

墳墓の中央に建てられた石柱には正面に「贈正四位上忌寸文祢麻呂將軍之墓地」、側面に「発掘天保二年九月二十二日」と刻まれている。この石柱は龍泉寺境内に残る石碑に刻まれた碑文によると、明治13年（1880）に最初に発掘された場所に建てたものであるという。

当時の堺県令（現在でいう県知事、このころ宇陀郡は堺県に属していた。）税所^{さいしょあつし}篤が内務省と直談判して資金百五十円を得て行った事業で、このほかに出土遺物の模造品を作り石碑の下に納めたこと、本物は帝室博物館に納めたことが記されている。

埋葬品を発見し代官所に届けた常七は、のちに名字帯刀を許され^{おおすみつね えもん}大隅常右衛門と名乗るようになる。埋葬品は代官所の命により八滝の龍泉寺境内に埋め、そこに塚を築いたという。以来、大隅氏と龍泉寺により、文祢麻呂將軍を弔う祭典が行われていたが、大隅氏が八滝を離れる際に1万円を龍泉寺に寄付し、このお金で毎年將軍祭を行うよう依頼した旨を石柱に刻んで龍泉寺墓地に設置した。

現在は、史跡整備を契機に地元住民を中心とした「文祢麻呂將軍顕彰会」が組織され、顕彰会の主催により秋のお彼岸に祭典を行うようになった。



文祢麻呂墓



明治期に建てた石柱



龍泉寺に残る碑文



大隅氏の石碑

さくら み じんじや
【桜実神社本殿】

佐倉の集落の天然記念物八房杉を擁する神社。本殿は一間社春日造、銅板葺。建立年は不詳だが、境内の隅に建立された合祀記念碑によると、明治43年（1910）八坂神社、十二社神社と合祀して現在の姿となった。瑞垣を回し、本殿と合祀した神社が並んでいる。

歳旦祭、神武さん、秋祭りのほか、合祀した神社の祭典（金毘羅さん、お稲荷さん等）を執り行っている。



桜実神社本殿

う だ のたかぎ
【菟田高城の記念碑】

石造。菟田高城と彫られた碑。桜実神社の北東にある山の頂に建てられている。『菟田野町史』（菟田野町史編集委員会 編/昭和43年（1968））によると、「佐倉では、神武天皇関係の史跡になっている「菟田の高城」の碑の前でゴクマキを行う。」とあり、このころには現在の場所に建っていたと推察される。4月3日の神武天皇の命日に佐倉の人々がここへ集まり、「神武さん」の式典と御供まきを行っている。令和2年（2020）より、式典のみこの石碑の前で行い、一般参拝と御供まきは桜実神社境内で行うようになった。



桜実神社合祀記念碑



菟田の高城の記念碑

とり み しゃ
【鳥見社（天神社）】

木造三間社流造、銅板葺き。向拝や軒まわりに彫刻が施されている。

『大和國宇陀郡神社明細帳』（奈良県庁文書/明治12年（1879））の追記によると、墨坂神社の境内社と位置づけられている。

現在の社殿は、榛原地域のある場所から移築したと伝わっているが詳細は不詳。昭和初期に発行された絵葉書には、「マガタマ池と天神社」と記され、鳥居の奥に現在と同じ姿の社殿が写る。部材の風食等を観察すると、相応に古い。



鳥見社本殿



昭和初期の絵葉書

5月5日の鳥見山ツツジ祭の際に、墨坂神社から宮司が出向き、山開きと登山者の安全祈願の式典を行う。

すみさかじんじや
【墨坂神社本殿】

墨坂神社は、榛原萩原字天野に鎮座する。向井山を背後にし、宇陀川の南岸に境内地があり、本殿、拝殿、楼門や八幡神社、恵美寿神社、市岐嶋神社、菅原神社、龍穴神社、稻荷神社、天神神社が祀られている。

木造一間社春日造檜皮葺、当初は西峠の「天ノ森」^{てんのもり}にあったが文安6年（1449）に現在の場所に遷座した。本殿は文久造営期（1861～1864）の春日大社本殿を移築したもので、元治元年（1864）の墨書がある。

とんど、茅野輪くぐり、火祭りなど、年間を通じて様々な行事が行われるが、一年で最も重要視されている秋季大祭では『日本書紀』崇神天皇3月条になぞらえて赤盾8枚と赤矛8竿を境内に飾る。



墨坂神社本殿

【阿騎野の万葉歌碑】市の指定有形文化財（歴史資料）

石造、歌碑。大宇陀地域事務所の西になだらかな丘があり、南側を公園として整備した場所がある。その一角に、高さ2mほどの万葉歌碑がある。



阿騎野の万葉歌碑

柿本人麻呂の詠んだ「東の野にかぎろひの立つ見へて
返り見すれば月傾きぬ」の歌が刻まれ、裏面に昭和15
年11月に現在地に設置された経緯と、表面の歌は国学
院大学名誉教授佐佐木信綱^{ささきのぶな}氏の揮毫^{きごう}であることが記されている。

石碑に刻まれたかぎろひの歌の追体験をする「かぎろひを観る会」は、この歌碑が設置されているかぎろひの丘公園で開催されている。



『名所旧跡古墳墓』より

【伝山部赤人の墓】

山辺三の山深くに、五輪塔が建っている。建立の時期など詳細は不明。『明治二十八年起 明治三十二年止 名所旧蹟古墳墓』（宇陀郡役所文書/明治32年（1899））に「山部赤人旧跡」と挿絵で紹介されているほか、『榛原町史』（昭和34年（1959）/榛原町）には「山辺（原文ママ）赤人の墓と伝承する石塔がある」と紹介され、現在の状況



伝山部赤人の墓

と変わらず、石材も相応に古いことから、このころには既にあったことがわかる。春の彼岸に五輪塔の前で（雨天時は山辺三振興センター）地元自治会主催による赤人会式が行われている。

【山部赤人の墓への道標】

石造物、伊勢街道とお越え道沿いに建つ道標。西面を平らにして、「山べの赤人古跡 これより八丁北／赤人のつかの玉浮圖千代ふりて／鳥のあとむすこけのいしふミ楳の家」と、右側に案内情報、左側には和歌が刻まれている。ほかの面には加工の跡がみられず、道標に建立の時期は刻まれていないが、『はいばらの伊勢街道～その周辺の歴史と文化』（榛原町/平成3年（1991））によると、宝暦年間（1751～1764）とある。



昭和34年（1959）ごろの伝山部赤人の墓（『榛原町史』より）



山部赤人の墓への道標

（3）活動

【都賀那岐神社 ダケ登り】

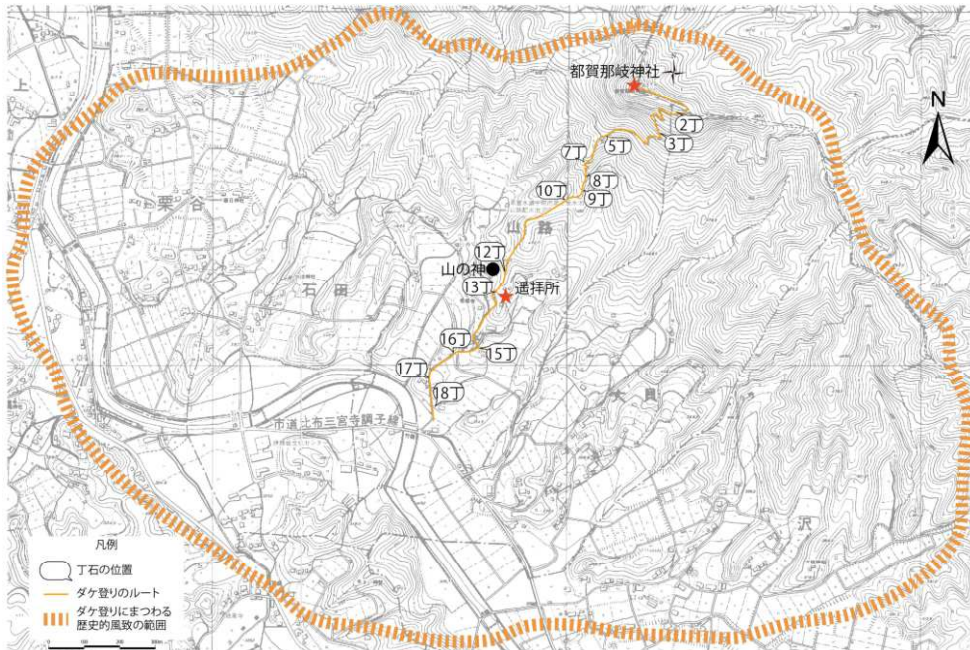
伊那佐山は、宇陀市のほぼ中心に位置する標高680mほどの山で、『日本書紀』第3巻 神武天皇即位前紀の中の、兄師木・弟師木^{えしき おとしき}を討伐し、疲れた兵たちをいやすため神武天皇が謡った謡²¹に登場する。

この、伊那佐山の頂上に鎮座する都賀那岐神社は、『文徳實録 仁寿2年（852）7月辛卯条』（新訂増補 国史大系）「辛卯、以大和國都賀那木神列於官社、」とあり古くからこの地に祀られていたようだ。

ダケ登りは、毎年4月最終日曜日、氏子が遥拝所に集まり、伊那佐山山頂にある都賀那岐神社本殿に参拝し式典を行い、神社前の広場で直会をする行事である。かつては早魃時に祈雨のため参拝し、太鼓踊りを奉納したと神社縁起に記録が残る。

昭和22年（1947）4月18日の大和タイムス（現在の奈良新聞）掲載の記事には、「伊那佐山の都賀那岐神社では十五日午後一時から恒例の嶽會式を盛大に行った。（原文ママ）」とあり、日程は動いているが長い伝統のある行事であることがわかる。

²¹ 「盾並めて 伊那佐の山の 木の間よも い行きまもらひ 戦へば 吾はや飢ぬ 島つ鳥 鶺鴒が伴 今助けに来ぬ」



ダケ登りにまつわる歴史的風致の範囲と、丁石の分布

【桜実神社 神武さん】

佐倉にある菟田高城で4月3日（神武天皇の命日）に行われるお祭り。古事記や日本書紀によると神武天皇がここで休息をとったと伝えられており、4月3日に近い日曜日に祭典と御供まきが行われる。

かつては桜実神社の北の山中に建立された菟田高城の記念碑の場所で、右の昭和43年ごろ（1968）の写真のように祭典から御供まきまで全ての行事を実施していたが、平成31年（2019）より神職と代表者が石碑の前で玉串奉納を行ったあと、桜実神社にて氏子一同で遥拝と祭典を行い、御供まきをするようになった。（平成31年（2019）開催時はコロナの影響で、御供まきではなく、餅の配布となった）

神武さんの行事は、大宇陀南部（下片岡・下垣内）や大宇陀^{もち}守道にも残り、山頂の遥拝所や記念碑の前でお参りをしている。



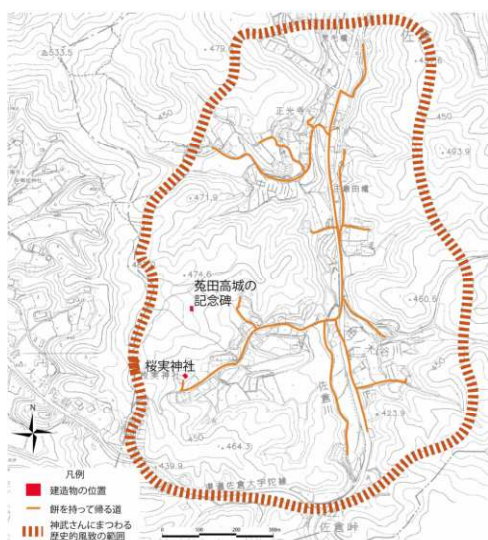
菟田高城の記念碑



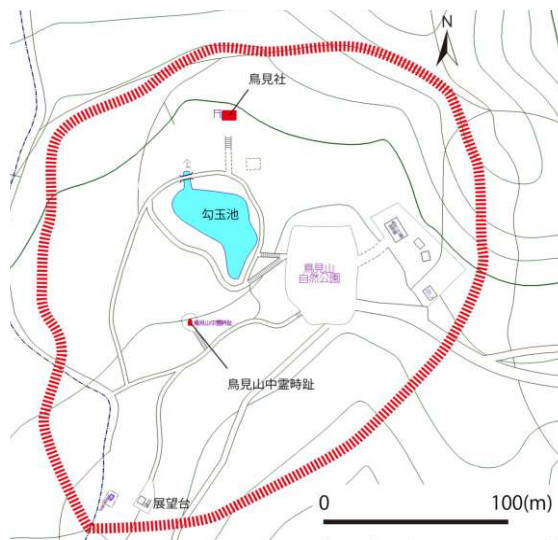
玉串奉納の様子



昭和43年（1968）ごろの御供まきの様子



神武さんにまつわる歴史的風致の図



鳥見山ツツジ祭にまつわる歴史的風致の図

【鳥見山ツツジ祭（花会式）】

宇陀市の西にそびえる鳥見山は、「記紀」に登場する鳥見山霊時ゆかりの地として近代に盛んに顕彰活動が行われた場所である。現在は、宇陀市榛原鳥見山公園の名称で宇陀市が管理しており、平成 19 年（2007）に「日本の歴史公園 100 選²²」に選定されている。宇陀郡一帯を見渡せる眺望と、ツツジや桜の名所として知られ、ハイキング客に人気がある。

この鳥見山公園を舞台に、毎年 5 月 5 日にツツジ祭が開催されている。本来は鳥見山の山開きの祭典で、墨坂神社の宮司が天神社に出向き、市および公園の関係者、登山客の立会のもと、献饌、修祓、玉串奉納などを行い、山の安全を祈願するほか、和太鼓の演奏があり、ツツジの植樹を行う。

『大和タイムス』昭和 22 年 5 月 15 日の記事に「榛原町長鳥見山の花会式は十三日行われたが満開のツツジに一日を楽しもうと各地から登山した人は正午までに五千人に及んだ（原文ママ）」とある。コロナ禍や天候不順の影響を受け、令和 3 年（2021）～令和 5 年（2023）は式典のみが執り行われた。



山開きの式典



太鼓の演奏



ツツジの植樹

²² 都市公園法施行 50 周年等記念事業実行委員会主催によるもので、優れた歴史的・文化的資源を有し、地域の活性化に貢献している歴史公園の中で自治体の推薦による応募の中から選ばれた。

【文祢麻呂將軍祭】

八滝西北、伊那佐山の山腹に八滝集落の墓地があり、そのすぐ側に文祢麻呂の墓がある。9月23日（祝）、朝から村の出会いで文祢麻呂墓周辺の草刈り清掃が行われ、同日10時から法要が始まる。

花とお供えで飾られている墓の前に八滝の人が集まり、龍泉寺のご住職による読経、焼香と続き、来賓・自治会長・顕彰会会長の挨拶で終わる。

天保2年（1831）に発見されて以来、墓を発見した大隅氏と龍泉寺にて毎年8月15日に文祢麻呂將軍の祭典を執り行ってきた。大隅氏が八滝を離れてからも前出（P70）の墓地の石碑に刻まれた文に従い、龍泉寺

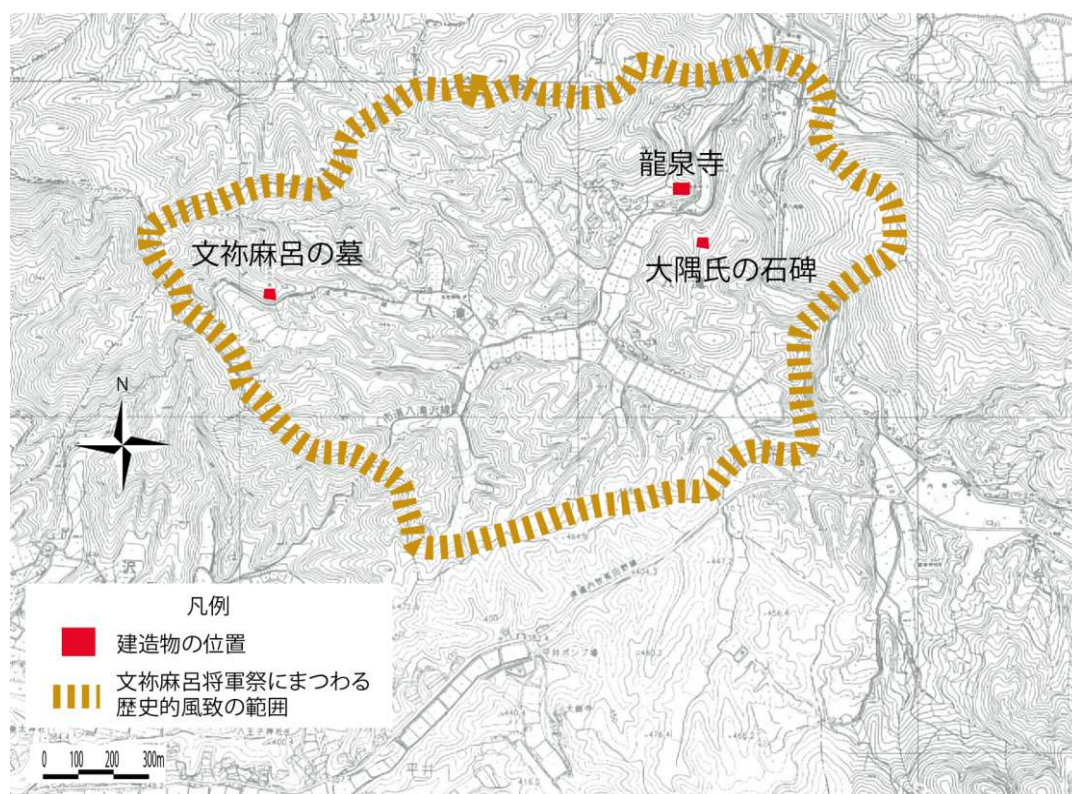
で有志による將軍祭が続けられてきたが、昭和57年（1982）に文祢麻呂顕彰会が設立されたのを機に、9月23日（祝）に行うようになった。



文祢麻呂將軍祭の様子



参列者が順番に焼香する



文祢麻呂將軍祭にまつわる歴史的風致

【墨坂神社例大祭】

墨坂神社では、毎年 11 月 1 日から 11 月 4 日にかけて秋祭りが行われる。1 日は「当屋祭」と呼ばれ、2 日は宵宮で、神輿が「天の森」のお旅所に渡行する。そこで一晩過ごしたのち、3 日の祭でお旅所から神社に向かって渡行する。神輿と太鼓台が墨坂神社に到着すると、楼門などから御供まきをする。昭和 35 年（1960）の御供まき風景の写真が残っている。4 日は後片付けののち後宴祭が営まれる。また、夜には当屋の引継ぎである「お当屋渡し^{とうやわたし}」が行われる。秋祭りの開催中、『古事記』崇神天皇の条になぞらえ、赤盾 8 枚と赤矛 8 本を楼門前に飾る。

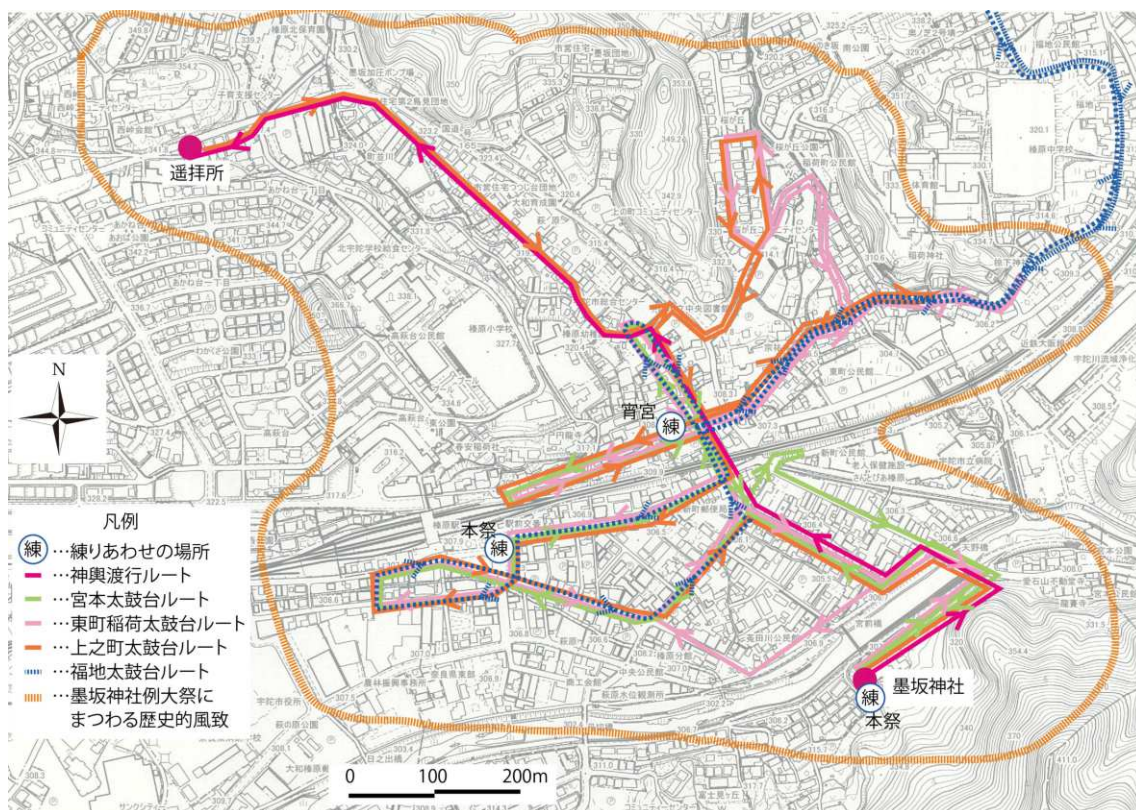


昭和 35 年 御供まきの様子
(吉田二郎氏撮影)



令和元年 境内前での練り合わせ

2 日の宵宮と 3 日の祭では、神輿のほかに太鼓台が出る。宮本、福地、上ノ町、東町の 4 基である。それぞれ、伊勢街道の旧宿場町の面影を残す町の中を練り歩き、宵宮では常夜灯付近、祭では墨坂神社境内で練り合わせをする。



墨坂神社例大祭のお渡りルート（令和元年（2019））

【かぎろひを観る会】

「東の 野にかぎろひの立つ 見えて かへり見すれば 月傾きぬ」は万葉集の中でもよく知られた柿本人麻呂の詠んだ歌である。かぎろひを観る会は、柿本人麻呂の追体験をする行事で、令和3年（2021）に第50回目を迎えた。

開催日時は旧暦11月17日の未明で、かぎろひの丘万葉公園で焚火を起し、火に当たりながら夜明けに立つはずの、かぎろひを待つ。

寒空の下に集った来場者をもてなすため、地元産の葛湯等が振舞われる。満月が西に沈もうとするころ、その場にいる全員が東の稜線を見つめる。空が明るくなりかけたところに、柿本人麻呂が眺めた情景を思い描きながら、かぎろひの歌を詠唱して終わる。

この行事は、昭和15年（1940）に行われた万葉歌碑の除幕式に端を発している。旧暦11月17日としたのは、「阿騎野の朝」を描いた中山正實画伯が气象台とともに推測した日であることに由来する。

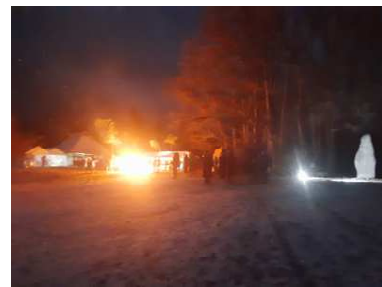
当時は焚火をして、小豆粥などを振舞った。以後、2年ほど町の行事として続いたが、それ以降は同好の士が集まり細々と開催していたと伝わる。

『広報おおだ第58号』（大宇陀町/昭和53年（1978）12月）によると、大宇陀町観光協会²³の主催で第7回目となる「かぎろひを観る会」を開催している。

現在まで行事は連続開催されており、人麻呂の追体験を求めて全国から万葉集に関心を持つ人が万葉公園かぎろひの丘に集まる。



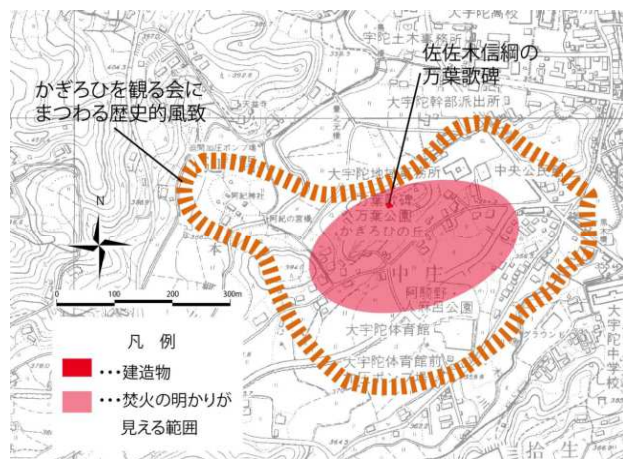
丘の上の焚火が遠くから見える



石碑をライトアップする



令和3年度のかぎろひを観る会



かぎろひを観る会にまつわる歴史的風致の図

²³ 大宇陀町観光協会は、『広報おおだ16号』（大宇陀町/昭和46年9月）によると、観光客の誘致・受入態勢の強化により町の振興を図るため昭和46年6月に発足した。

【赤人会式】

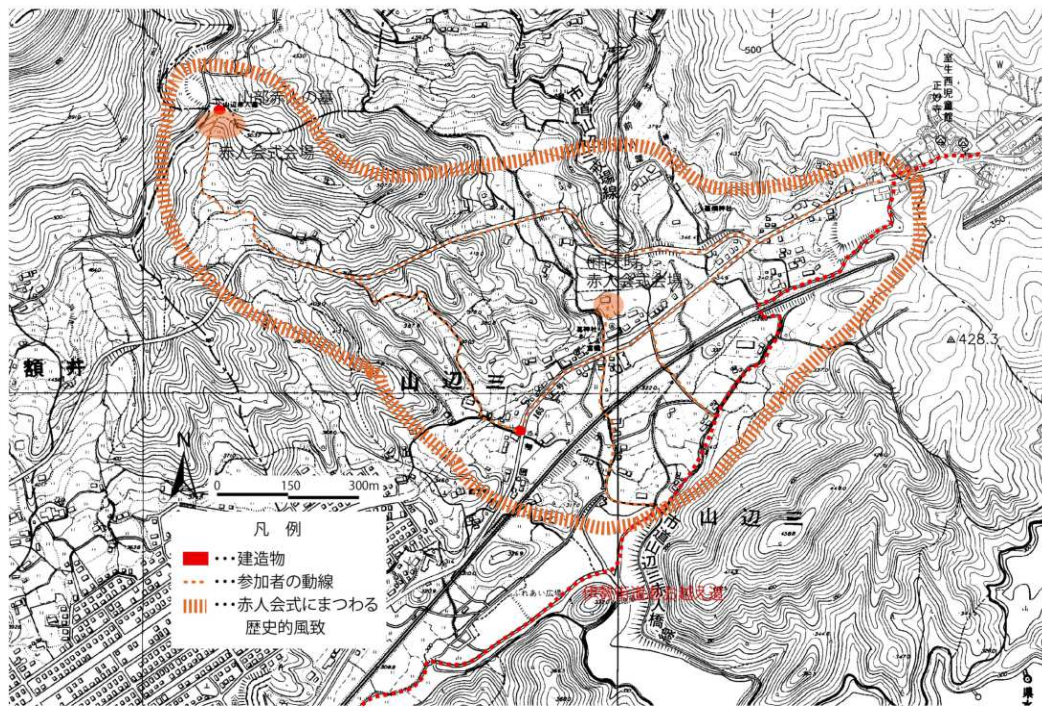
毎年3月21日13時～、地元山辺三自治会の主催により開催される会式。万葉の歌人、山部赤人の墓と伝わる五輪塔があり、この場所で法要が行われる。『室生ダム水没関係地民俗資料緊急調査報告書』（昭和46年（1971）/奈良県教育委員会）に「この赤人の墓の前で四月下旬に村の祭として、お祭が営まれた。」とあり、



赤人会式の様子
(写真提供 山辺三自治会)

現在と開催日程がひと月ずれているものの、そのころには既に営まれていた行事であることがわかる。

五輪塔前に祭壇を設け（雨天時は集会所に祭壇を設ける）、西方寺住職による読経、赤人をしのびながら参列者全員が焼香を行う。以上で法要は終わり、お供えを分配し、解散する。

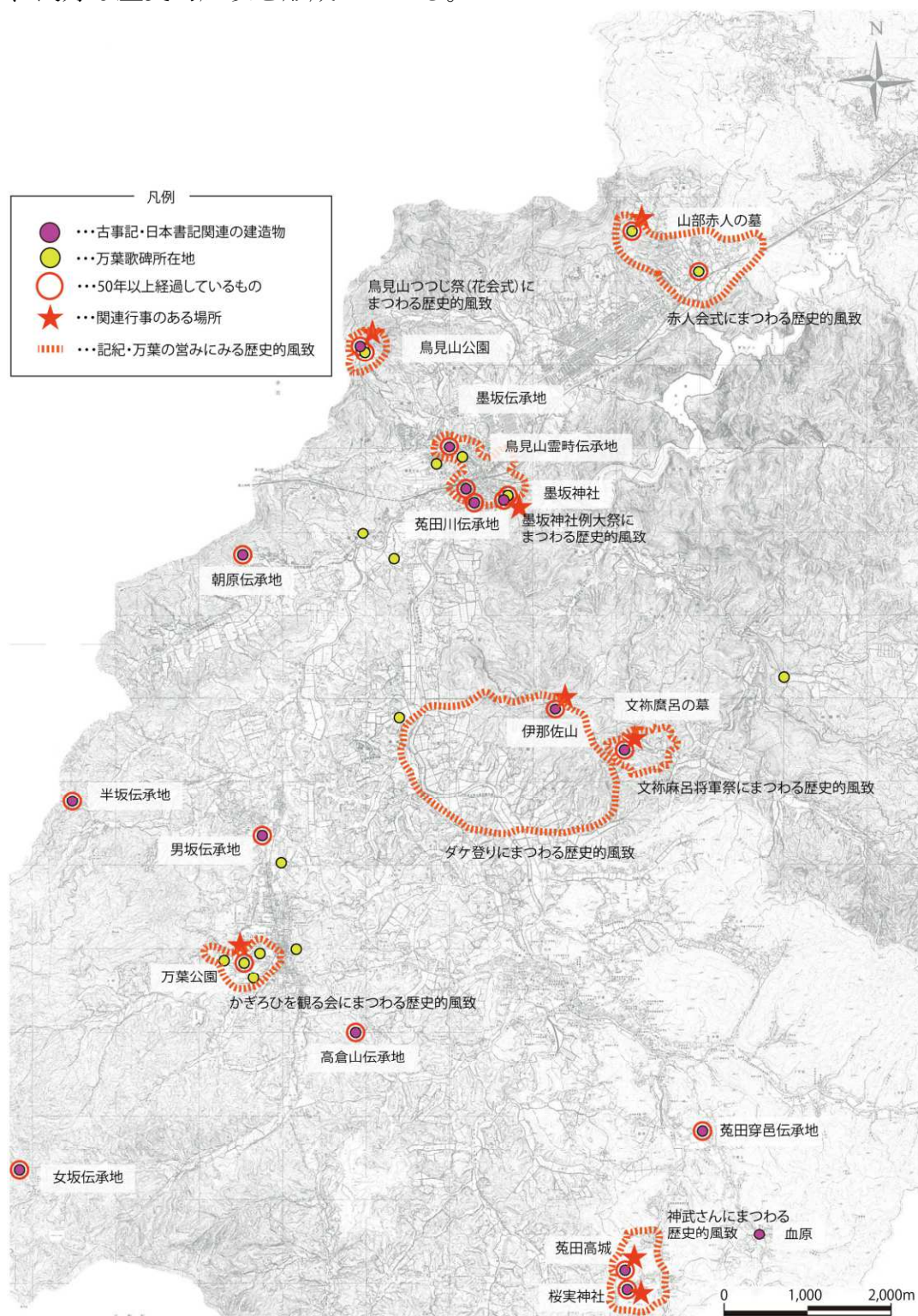


赤人会式にまつわる歴史的風致の図

（４）おわりに

1300年前の時代に編纂された書物にゆかりの深い地名が多く残る宇陀。江戸時代には、旅の目的地のひとつとして、記紀・万葉ゆかりの地が紹介されたり、その場所へ向かうための道標や歌碑が建てられたりと、地元の人にとって来訪者に誇れる大切なものであるとの認識が強かったことが伺える。また、万

葉秀歌の追体験や神武天皇や万葉歌人の法要等、ゆかりの地と推定される場所
 においての活動が現在も見られ、山と緑が織りなす山村集落の景色と相まっ
 て、良好な歴史的風致を形成している。



記紀・万葉にまつわる歴史的風致

コラム 1 ^{あきの}壁画「阿騎野の朝」



壁画「阿騎野の朝」（宇陀市中央公民館 蔵）



移転決定時の新聞記事

宇陀市中央公民館の大ホールに飾られている壁画、「阿騎野の朝」（市の指定有形文化財）。「東の野にかぎろひの立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ」という柿本人麻呂の歌を題材に、持統天皇 6 年（692）に阿騎野へ遊猟に来た軽皇子（のちの文武天皇）とその一行が、夜明けを迎えている情景を描いたものである。

この壁画は、昭和 15 年（1940）の紀元二千六百年記念事業の一環で橿原市に建設された「大和国史館」の大展示室の壁画であった。制作を担当した中山正實画伯は、「かぎろひ」の歌が詠まれた場所や日時について、当時の気象台に問合せ、実際に大宇陀へ赴き考察を重ね、壁画の場所は阿紀神社前面の丘の上（現在の万葉の丘公園）、日時は持統天皇 6 年（692）11 月 17 日午前 6 時前後であると導きだし、この壁画を完成させた。

壁画の転機が訪れたのは昭和 55 年（1980）秋。県立橿原考古学研究所附属博物館が新築され、大和国史館の展示物はすべて博物館へと移されたときである。役目を終えて閉鎖された大和国史館に置かれたままとなった壁画の状況を知った大宇陀町は、画題ゆかりの地であり、かねてよりこの壁画を迎え入れたいとの意向があったことから、所有者である奈良県に壁画の譲渡を申し出た。

奈良県から無償譲渡の回答を得て、今度は壁画の移転方法についての検討が進められた。幸いにも、壁に直接ではなく、キャンバスの上に描いて壁に取り付けた絵であったため、絵画修復家の手により壁画の移転が可能と判断された。

キャンバスに描かれた壁画とはいえ、予想以上に壁面に強固に取り付けられていたため、剥がす作業は難航した。昭和 56 年（1981）11 月 16 日から作業に着手し、11 月 26 日に剥がす作業は完了、破損箇所等は修復し、昭和 57 年（1982）2 月 27 日に現在の場所（中央公民館大ホール）への移転作業が終わった。

これらの一連の工事は大宇陀町制 40 周年記念事業として位置づけ、除幕式等の記念行事が盛大に行われた。大和国史館と共に失われる運命にあった壁画は、紆余曲折を経て、画題のふるさと大宇陀に安住の地を得たのである。